

老齢動物の病気について

前号では、よく遭遇するステージ B2 と症状の軽いステージ C の治療についてお話ししました。ステージ C になり症状、特に咳や呼吸状態が悪い場合は、肺水腫の発症が考えられます。これまでの代表的な薬であるピモベンダン（強心剤）、ペナゼプリル（ACE 阻害薬：抗アルドステロン作用のある薬）の他に、さらに利尿薬を使っていくことになります。肺水腫の治療はこの「利尿薬」と「身体に入る水分・塩分」のバランスがキーポイントであると言っても過言ではありません。

利尿薬を使うとオシッコを我慢できず粗相したりトイレに行くのが間に合わないこともあったり、飼い主さんにとっては悩ましいことであると思います。しか

し、肺水腫の治療にはループ系の強力な利尿薬が必要です。肺水腫が落ち着いてきたら、利尿作用は弱い抗アルドステロン作用のあるスピロノラクトンなどを使い再発を防ぎます。

利尿薬は身体の中からオシッコに水分を出します。しかし医学的には一緒に塩分（Na）を出すことに意義があります。身体の中で塩分（Na）は、浸透圧の関係で水とくっついて存在するので、オシッコとして塩分と水分を出すことで、心臓が動かさなければならぬ循環血液量を減らすことになり、心臓は楽に動けるようになり、また肺の間質に渋滞してたまっている水分を出して肺水腫を治療します。

利尿薬は水と一緒に塩分を出します。摂取する塩分

② 犬の僧帽弁閉鎖不全症（MR）

7.MRと診断された時、飼い主は何をすべきか？

～ MR の治療について（その2 利尿薬について）～



文・写真 中西章男
text & photo by Akio Nakanishi

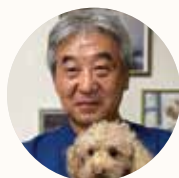


が少なければ、利尿薬の必要性は軽減されるので、食べ物として身体に入る塩分が少なければ、利尿薬も減らせ、肺水腫のリスクも軽減されます。心臓病食が低塩なのはココに理由があります。

肺水腫が重度の場合には、入院して酸素室に入り、点滴で身体に入る水分と塩分（電解質）を調整しながら、強心と利尿を考え様々な投薬を試みます。この時、投薬は即効性と調整のしやすさから静脈内に点滴ルー

トから入れることが多いです。特に腎臓が悪い場合は利尿をかけ過ぎると循環血液量が減り尿を作れなくなるので微妙なバランスが求められます。

今号では主に利尿薬について解説しました。飼い主さんとして考えることは、日頃からペットが摂取する塩分には注意して、MR の疑いがあると分かった段階から、人の食べ物やおやつなど過剰な塩分を与えないように心がけましょう。（次号に続く）



Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社